ながれ

夏めく街の崖線（がいせん）

岡田　精一郎（おかだ　せいいちろう／特定非営利活動法人マングローバル 代表理事）

崖線とは崖が連なる地形の事で普段は聞き慣れない言葉である。子供の頃に多摩川の畔が遊び場だった世田谷出身の私にとって、水と緑に次いで崖は馴染み深い存在。そんな懐かしさから、多摩川と密接な関係性を持つ「国分寺崖線」の景趣を書き起こしてみた。

東京都立川市を起点に国立市、国分寺市、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市を越えて世田谷区、大田区まで全長約 30km を東西方向に横切る国分寺崖線は、古代の多摩川が南に流れを変えていく過程で武蔵野台地を削ってできた河岸段丘であり、別名「ハケ」とも呼ばれる。崖が形成されるまで約 10 万年以上の時を要したと考えられており、麓から頂上まで高低差が 10m ～ 30m あり天候や地域によって富士山や丹沢も眺望できる。崖上には緑豊かな雑木林の中にゲンジボタル、カブトムシ、タヌキ等の希少生物も棲みつく。一方、崖下では台地に降り注いだ雨水が地下に浸透して傾斜面や窪みから湧き水が流れてくる場所も数多く見られる。今回は、世田谷区成城から大田区下丸子まで全長約 10㎞ある崖線区間を歩いた昔の散策記憶をお話ししていきたい。

●崖と調和する住宅地〈成城・岡本・瀬田へ〉

小田急線成城学園前駅から徒歩 10 分にある喜多見不動堂を出発地点とした。成城地区は国分寺崖線の環境保全・水資源保護・景観に配慮した街づくりが行われ、成城憲章というルールが制定されている。崖線の緑地帯ではアカマツやモミジ等の落葉樹林が生い茂り、みどりの生命線としてグリーンベルト機能も併せ持つ。成城を後にして岡本地区へと足を運ぶと、崖線地形の環境を好んだ歴史的人物の別荘跡地が保存されている。三菱財閥の岩崎家別邸・庭園（静嘉堂文庫美術館）や旧小坂家住宅が挙げられ、今でも二子玉川の奥座敷としての名を誇り、宅地開発から免れた崖斜面には竹藪など手つかずの自然が残る。

●都内唯一の渓谷〈野毛から等々力へ〉

東急大井町線の上野毛駅は、国分寺崖線を切り通して建設したため半地下構造だ。崖を意味するノゲの地名だけあって、下車すると地形が即理解できる。隣町では谷沢川が崖線に切れ込み、浸食により形成された都内唯一の等々力渓谷がある。湿性植物や古代の地層も出現し、気温が地上と比べて２℃程度低く水のせせらぎに涼を感じる避暑地である。

●古墳で歴史を読み解く〈田園調布へ〉

田園調布地区の崖線には6世紀前半～7世紀中頃に築造された多摩川台古墳群が連なり、古代人が自然資源に恵まれた崖線沿いで巧みに生活してきた痕跡が伺える。そして崖線は大田区下丸子駅付近の光明寺で終わるのだが執筆中に地形図を開いてみると、環境文明21の事務所は国分寺崖線上にほぼ位置する事にふと気づかされた地形散策の夏であった。